

福井県立坂井高校

# 大学進学志望に応える学校改革

放課後講座を一新し、総合型・学校推薦型選抜に  
対応した進路探究などを通じて、思考力や表現力を育成



学校概要

- ◎設立 2014（平成26）年
- ◎形態 全日制／食農科学科、機械・自動車科、電気・情報システム科、ビジネス・生活デザイン科／共学
- ◎生徒数 1学年約250人
- ◎2021年度進路実績（現役のみ） 国公立大は、福井大、福井県立大に5人が合格。私立大は、金沢工業大、仁愛大、福井医療大、福井工業大、岐阜協立大、同志社などに延べ30人が合格。短大・専門学校進学58人。就職137人。

## 変革の背景

専門性を生かして就職する生徒が多い中、  
大学進学志望者への支援が課題に

福井県立坂井高校は、食農科学科、機械・自動車科、電気・情報システム科、ビジネス・生活デザイン科の4学科8コースを擁する県内最大規模の総合産業高校だ。2014年度、複数の専門高校・学科が統合して開校した。ロボットコンテストでの県大会上位入賞、お菓子の商品開発・販売など、生徒は各コースの専門性を発揮して活躍するほか、17年度には、野球部が夏の全国高校野球選手権大会に初出場を果たすなど、部活動も盛んだ。

そうした同校だが、開校当初は生徒指導が課題だった。教師は、生徒が落ち着いて授業を受けられるよう、服装や挨拶の指導を徹底し、生徒の規範意識の向上に努めた。生徒指導を基盤とする学校文化は今も受け継がれていると、内藤俊治校長は語る。

「本校に赴任した時に強く感じたのは、生徒が成長するためにどうすればよいのかを第一に考える、先生方の意識の高さでした。生徒が不安定な時ほど、教師は前向きな姿勢で生徒に寄り添っています。生徒指導に力を入れてきた経験が、教師としてのしつかりとした基盤となっていると感じています」

生徒指導とともに、同校が開校から一貫して取り組んでいるのが、多様な希望進路に応

える進路指導だ。4学科8コースを擁するため、進学・就職のいずれも希望分野は幅広く、外部の資格・検定試験を受験する生徒も多い。そうした中で課題だったのが、大学進学指導だ。就職希望者の割合が高いこともあり、大学進学志望者が周りの雰囲気にならされて進路変更をすることがしばしばあった。また、教育課程は専門科目に即していたことから、特に

国公立大学を志望する場合は5教科の個別対策が必要であり、生徒も教師も、部活動での実績を生かして、指定校制による学校推薦型選抜を利用しようとする意識が強かったという。

開校以来、放課後週2回、希望者を対象に国語・数学・英語の補習講座「放課後パワーアップタイム（以下、放課後PUT）」を行っ

ていたが、それにも課題があったと、進路指導部長の出口浩史<sup>ひろふみ</sup>先生は語る。

「放課後PUT」は、生徒の基礎学力の定着には一定の効果がありました。進路志望者として、授業の補習の希望者が混在していたため、それぞれの課題に対応した指導をしきれませんでした。講座を担当する教師から、何に取り組ませればよいか分からないといった声が進路指導部に寄せられたこともありまし

## 変革の一手

### 大学合格というゴールから逆算して、1・2年次の放課後講座を組み立てる

「このままでは、生徒の希望進路の実現につながらない」という危機感から、19年度、進路指導部進学担当の上野早苗先生を中心とする「放課後PUT」の改革に着手した。

まず、講座の目的を、4年制大学と医療看護系学校の進路志望者、及び公務員就職希望者への支援に絞った。次に約30人の受講希望者に進路志望調査を実施し、進学の目的、志望大学・学部・学科名、受験予定の入試方式、志望校への思い、受講への意気込み、自分自身につけたいと考える力について書かせた。そして、進路指導部の教師は、受講希望者の

志望大学・学部に絞って、総合型・学校推薦型選抜の小論文や面接などの試験内容、必要な資格・検定試験などについて調べ、3年間の講座の内容を決めていった。

「本校を『進学できる学校』にしたいと思っていますが、『進学校』にしたいわけではありません。『希望進路の実現』というゴールから逆算して、入学時からすべきことを考え、1〜3年次それぞれのプログラムを作成しました。必然的に、当時進行していた大学入試改革と向き合うことになり、これからの社会や大学で求められる資質・能力についても深く考える機会になりました。そうした環境変化の中でも、就職率を維持しつつ、大学進学志望もかなえる学校となり、地域からの信頼をさらに高めることを目指しました（上野先生）

「放課後PUT」は、次のようにリニューアルした。1年次は、学習習慣と基礎学力の定着を目的として、国語・数学・英語の指導をローテーションで週2回実施。加えて、ベネッセの「スタディープログラム」(\*1)のテキスト及び学習動画を活用し、生徒が各自で家庭学習に取り組むこととした(22年度からは、「Classi」[\*2]を活用)。

2年次は、小論文・面接で求められる思考力や表現力の向上を目的とし、「進路探究」「論理言語力」「現代の課題」「小論文」のいずれ

図1 「放課後パワーアップタイム」2年次の講座内容

実施回数	毎週水曜日の放課後50分間。6〜3月で合計17回+夏季休業中4回+実力診断テスト2回
実施内容	①使える知識・技能[学力]の習得、②思考力・表現力の育成、③主体性・協働性の伸長を目的として、毎回、次の4つのいずれかをテーマにした課題を実施。 進路探究：学習プランの作成、夏季休業中の取り組みの共有など。 論理言語力：「Literas 論理言語力検定 ワークブック」(*3)を活用して、読解力や聴解力などを育成。 現代の課題：環境、福祉など、分野ごとに現代の課題について学び、自身の志望分野との関連性を考える。 小論文：小論文の書き方を学ぶ。 ほかにも、夏季休業中の課題として、オープンキャンパスの参加レポートや志望分野に関する書籍を読んだ感想レポートなどがある。

※学校資料を基に編集部で作成。

かをテーマにした課題に週1回取り組むことに(図1)。そして、志望校の入試に必要な教科の学習には、「Classi」の学習動画などを活用しながら個別で取り組むことにした。  
1・2年次に段階的に進路意識や教科学力、思考力・表現力等を高めていき、3年次は、志望校の入試に応じた個別指導を行う。また、公務員試験対策に特化した講座も、1〜3年生を対象に設けた。

\*1 ベネッセが提供する、これまでの学びの積み残しをなくし、これからの学びの積み上げをサポートする、学習・診断を一体化した教材。 \*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。 \*3 ベネッセの「Literas 論理言語力検定」の対策教材で、言語力の育成や社会への理解を深めることをねらいとした教材。詳細はP.59参照。

## 社会の変化と大学入試改革を踏まえ、 教科を超えて教師の協力を得る

一新した「放課後PUT」の実施にあたっては、講座内容に加え、今後の社会の変化と、その社会を生きていく生徒が卒業までに身につけておきたい資質・能力、さらに大学入試改革の内容についてまとめた資料を作成し、進路指導部の教師が各教科に説明して回った。

「大学入試対策と言えば、教科学力を強化する指導が一般的だったので、先生方からは、総合型・学校推薦型選抜の対策を中心とした『放課後PUT』の内容で大丈夫なのかといった声も聞かれました。しかし、大学入試が変わるこれからは、思考力や表現力などを高め、社会課題に対する意見をしっかりと持たせることができれば、国公立大学の合格も目指せると、粘り強く説明しました」（上野先生）

出口先生は、「放課後PUT」に意欲的な教師を進路指導部に配置し、取り組みを後押しした。進路指導部進学担当の前田圭佑先生は、小論文指導の協力をすべての教科に呼びかけたという。

「部活動を頑張り、さらに希望進路をかなえようと『放課後PUT』にも真剣に取り組み生徒の力になりたいと思い、先生方に生徒の支援をお願いしました。多くの教師に見守られていると感じられれば、生徒のモチベー

ションも高まると考えました」

すると、以前より小論文指導の中心を担っていた国語科に加え、理科・数学科が大学入学共通テスト対策の個別指導にあたるようになった。政治・経済の講座は地理・歴史科の教師が、医療・看護の講座は養護教諭が講師を務めるなど、教科を超え、全校で指導にあたる体制がつくられていった。また、工業科の授業で課題研究を工夫すると、生徒が自身の志望を深く考えるようになった。

「放課後PUT」の成果はすぐに表れた。一新した2年目に行われた21年度大学入試では、国公立大学に4人が合格。翌22年度大学入試では、過去最高の5人が合格した。

そうした先輩たちの姿に刺激を受け、生徒の学習姿勢は前向きになった。途中からでも「放課後PUT」を受講したいという生徒や、3年生になったら1日でも早く個別指導を受けたいと申し出る生徒もいる。

「国公立大学の合格者数が急増したことで、先輩がロールモデルとなり、大学に進学し、専門分野の知識や技能を高めてから就職しようといったキャリア観の変化も起きています。入学当初から大学進学を希望する生徒が増えていることから、『進学もできる学校』というイメージが、地域に浸透しつつあると感じます」（出口先生）



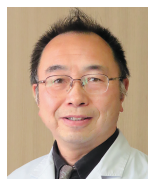
校長  
**内藤俊治** ないとう・しゅんじ  
教職歴38年。同校に赴任して4年目。



進路指導部長  
**出口浩史** でぐち・ひろふみ  
教職歴36年。同校に赴任して9年目。国語科。



進路指導部進学担当、3学年主任  
**上野早苗** うへの・さなえ  
教職歴27年。同校に赴任して8年目。国語科。



MH事業プロデューサー  
**南良一** みなみ・りょういち  
教職歴40年。同校に赴任して2年目。数学科。



進路指導部進学担当、2学年担任  
**前田圭佑** まえだ・けいすけ  
教職歴11年。同校に赴任して2年目。数学科。

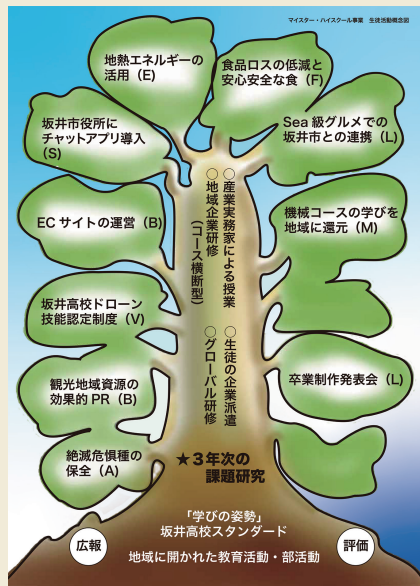
## 変革の成果・展望

文部科学省の事業指定を機に、  
学科共通で育成を目指す資質・姿勢を策定

進学意識も定着しつつある同校は、21年度、文部科学省「マイスター・ハイスクール」（以下、MH）（\*4）の指定を機に、資質・姿勢ベースの共通認識構築に向けて動き出した。

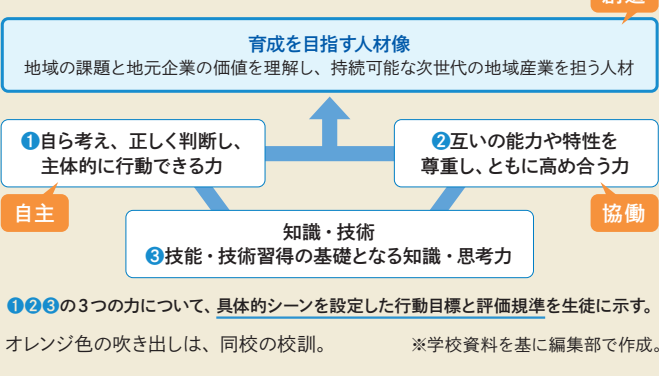
\*4 第4次産業革命の進展、デジタルトランスフォーメーション、6次産業化等を踏まえ、産業界と専門高校が一体・同期化して職業人育成システムの構築を目指す事業。

図2 「マイスター・ハイスクール」における「生徒活動概念図」



※学校資料をそのまま掲載。

図3 「坂井高校スタンダード」のグランドデザイン案



※学校資料を基に編集部で作成。

MH事業プロデューサーの南良一先生は、そのねらいを次のように語る。

「全生徒が対象のMH事業を通じて、普通教科・専門教科の教師が、学科横断で連携して先端研究や地域連携に取り組むことで、それぞれの専門性を発揮しながら、学校全体としての特色を打ち出すことが必要だと思っています。そこで、まずは本校で身につけるべき全コースで統一した『学びに向かう姿勢』の共通認識を、教師間、そして教師と生徒の間で持てるようにしようとしています」

MH事業の概要を示した「生徒活動概念図」(図2)では、MH事業で育成を目指す人材像に近づくための土台に、「学びの姿勢」坂井高校スタンダード」を位置づけた。現在、そ

の具体的な内容を、7人の教師から成る「学びの姿勢グループ」が中心となって検討している。同グループでは、全教師に生徒の強みと弱みを挙げてもらい、SWOT分析で現状を整理した上で、「育成を目指す人材像」と、その達成に向けて育成する3つの力を設定(図3)。その3つの力の発揮が求められる具体的な場面として、「授業」「提出物」「清掃」「友達関係」などを挙げ、各場面における行動目標と評価規準を作成した。22年3月末に作成

した原案を、4月以降、職員会議で議論しながら練り上げ、22年度中の運用を目指している。

「坂井高校スタンダード」のグランドデザインは、MH事業指定終了後も継続するものとするため、事業で育成を目指す人材像を意識しつつ、校訓を踏まえたものになりました。行動目標や評価規準は、生徒が各目標を具体的にイメージできるように文言にすることを心がけました。その原案を基に全教師で議論を重ね、本校の伝統として継承していく、まさに『スタンダード』となる内容にしたいと考えています(上野先生)

MH事業の中心である地域連携は、コロナ禍の影響でほとんどの活動が中止となったが、全コース合同の課題研究発表会を22年2月に初めて実施した。実施後の生徒へのアンケートでは、「他コースの発表に刺激を受けた」といった声が多数寄せられた。

「学科横断で課題研究を行おう」といった声が、教師から上がっています。他コースの学びを知ることで、生徒は様々な産業が繋がっていることに気づくでしょう。その経験は、大学進学後や就職後にも必ず役に立つはずで、坂井高校スタンダード」によって、生徒や教師の認識が共通のものとなり、『放課後PUT』を始めとする従来の取り組みにおいても、一層の成果が出ると期待しています(南先生)